

皮肉の解釈

米沢久美子

(1999. 6. 26 発表)

1 はじめに

言葉を理解しようとする時には語彙の意味と統語的意味を考えるが、コンテキストの中ではその意味が変わる場合がある。例え、文から得られる情報で文の意味は分かっても、コンテキストから得られる情報が適正に処理できないと、発話の意図が正確に理解できない。皮肉は、このようなコンテキストによって意味の変わる語用論的意味を考えなければならない。

コミュニケーションが非母語で行われていると字義通りの意味解釈はできても発話の意図が分からないことがあるが、それは前提となる思考が非母語話者と母語話者の間で共有されないからだと考えられる。それでは、具体的にどのような思考が共有され、どのような思考が共有されないのであろうか。

本研究は、日本語母語話者（以後、JNS と呼ぶ）にとって皮肉と解釈される発話を例にとり、日本語非母語話者（以後、JNNS と呼ぶ）との解釈の異同を通して、皮肉を解釈する際の前提となる思考について探った。

2 皮肉は如何に解釈されるか？

皮肉は、表意がプラス評価であった言語表現が、マイナス評価として解釈されるものである。皮肉は、評価を伴う含意が解釈されるものといえる。皮肉の解釈の過程を、Sperber & Wilson (1986) はエコーになぞらえた。皮肉としての発話は、エコーが壁や遠くの山のような障害物にぶつかってはねかえるように、エコーの対象となる意見にぶつかって皮肉となって返ってくるものである。具体例としては、以下のものを参照されたい。

例；A と B と C は中学の同級生である。

A：C はお前と仲がいいの？

B：うん。C は、いい奴だよ。・・・・・・・・・・・・・・・・①

A：C は、お前がずる休みしたの、先生に言いつけてたぜ。

B：そうか。 まったく、C はいい奴だよ。・・・・・・・・・・・・・・・・②

①はBがCをほめた発話で、字義通りの意味解釈ができるが、同じ表現でも②は皮肉である。この時、Bは前の発話①を思い浮かべ、関連性をもたせている。②で話し手Bの含意は『Cはひどい奴だ』であるが、エコーの対象となる意見は、①の『Cは、いい奴だ』である。話し手は含意のみを伝達しているのではなく、表意から含意までを伝達していると考えられる。これは、表意なしには皮肉の効果が期待できないからであり、話し手の情動・態度・要望など、様々な情報が皮肉に盛り込まれることが多いからである。ところが、このように一連のエコーされる思考が、一般的なものであれば皮肉の解釈は容易であるが、ある文化固有のものであれば、その文化圏以外では皮肉として解釈されにくいと考えられる。それでは、エコーされる思考が一般的なものと、日本固有なものは具体的にどのようなものがあるだろうか。

この実態を調査するために JNS・JNNS と 2 群に分け、共に同じ解釈となる皮肉と、解釈の異なるものについて分類した。被調査者は、JNS 104 名、JNNS 96 名である。この調査から、両者が一つの解釈に集中するもの、JNS は集中するが JNNS は分散するものが明らかになった。

3 JNS と JNNS の解釈が一致しやすいもの

JNS ・ JNNS で解釈が集中するものは、以下のような皮肉である。

Q1 電車のなかで小さい子ども達が大きな声でふざけている。

話しこんでいるため、気がつかない親たちに、老婦人が話しかけた。

老婦人：お宅のお子さん達ですか。

親：ええ。

老婦人：おぎょうぎのいいお子さん達ねえ。

この老婦人の発話の意図を、ほとんどの JNS ・ JNNS が一致して「静かにしてほしい」という要望と解釈した。ここでエコーの対象となる意見は『おぎょうぎのいいふるまい』であり、電車の中でのマナーについての認識が話し手と聞き手で共有されると、話し手の意図する皮肉としての含みが伝達される。表意⇒皮肉⇒要望と、二段階でその意味を汲み取らなければならないものでも、発話の意図が伝達される可能性が高い。調査による結果は以下のようなものである。ⁱⁱⁱ

老婦人が思っていたこと	JNS	JNNS
a. 静かにしてほしい。	99% (103人)	95% (91人)
b. かわいい。	1 (1)	4 (4)
c. しつげがいい。	0 (0)	1 (1)
d. おぎょうぎがいい。	0 (0)	0 (0)

4 JNS と JNNS の解釈が分かれるもの

JNS と JNNS との解釈が分かれるものの例を2つ挙げるが、一つは既有知識の有無に関するものであり、他方は一般的でない接続詞の意味解釈に関するものである。

Q2 次郎と圭太が、テレビで野球を見ていると、解説者があるバッターについて次のように解説した。

解説者「このバッターの調子が悪いのは、要するに打てないからでしょうね。」

それをきいた次郎は、隣でみていた圭太にこう言った。

次郎：なんて鋭い分析なんだろうね。^{iv}

ここで、発話者の発話と解説者の発話の矛盾に気がつくには、野球というスポーツについての知識が必要である。調査後のインタビューによると、皮肉と解釈しなかった JNNS は「野球のことについてあまり詳しくない」「野球に興味がない」と述べていた。つまり、野球についての既有知識の有無が皮肉としての解釈に関係する。bの「きびしすぎる」は「鋭い」の意味拡張でcの「論理的な説明」dの「わかりやすい分析」というのは「鋭い分析」の言い換えであり、いずれも「鋭い」と同じ意味領域のものであり含意を解釈したものとはいえない。

次郎がテレビの解説について思っていること	JNS	JNNS
a. たいしたことのない分析だとばかりしている。	92% (96人)	48% (46人)
b. 解説者の分析はきびしすぎる。	5 (5)	33 (32)
c. 筋の通った論理的な説明だ。	2 (2)	13 (12)
d. わかりやすい分析におどろいた。	1 (1)	6 (6)

次の設問は「しかし」という接続詞の一般的でない用法が JNNS によって理解されなかったと思われるものである。

Q3 先生は、これから委員会に出なければならぬので、手紙を書き直す時間がない。

ゼミ室をのぞいて、手伝ってくれそうな学生をさがしている。

先生：だれか、この手紙を清書してくれないか。

山崎：僕がやりましょうか。

先生：しかし、君の字はきれいだからね。

この例で「しかし」という接続詞がないと、字義通りの解釈がされることが予想されるため、接続詞「しかし」が皮肉を解釈するキーワードとなると考えられる。「しかし」の典型的な用法というのは、「A は B である。しかし、C ではない。」のような逆接である。ところが、前件と後件が矛盾しない文脈もある。Mizutani & Mizutani (1979) の例でみると、オフィスでの来客との「先日はどうも」という挨拶の後の「しかし、さむくなりましたねえ。」の「しかし」である。これを、Mizutani & Mizutani は話題の否定とみている。本例の場合は、清書についての協力の申し出に対し、字について言及しているのであるから全体的に話題が転換しているわけではないが、すぐ直前の協力の申し出という話題を否定して、関連はあるが異なる話題を新たに提供しているとみることができる。

先生は山崎君に清書を頼むか否か？	JNS	JNNS
a. 山崎君の字はきたないから、頼まない。	65% (68人)	44% (42人)
b. 山崎君の字はきたないけれど、時間がないから頼む。	22 (23)	13 (12)
c. 山崎君の字はきれいすぎて、先生が書かなかったことが分かってしまうから頼まない。	12 (12)	33 (32)
d. 山崎君の字はきれいだから頼む。	1 (1)	10 (10)

この調査では、「山崎君の字はきたない」とする皮肉の解釈は a と b の合計で JNS は 87%、JNNS は 57% である。このうち、清書を頼むか頼まないかで多少意見は異なるが、皮肉の解釈をみるため、ここでは皮肉としての意味の「きたない」か表意の「きれい」かについて考える。調査結果から皮肉の解釈と表意の解釈の比率は、JNS では 87 : 13、JNNS では 57 : 43 である。この結果から、JNS と比べて JNNS の表意の解釈が多いことが分かる。このような典型例でない「しかし」の解釈は、JNNS にとって難しいらしく、「しかし」に疑問符(?)をつけた被調査者が数名いた。このような JNNS は理解不能になった時、「しかし」を無視した表意の解釈をする傾向があることが、インタビューによって分かった。

5 おわりに

調査から JNS と JNNS との皮肉についての解釈の異同をみてきた。両者の解釈の異同を通して、エコされる思考との関係を見ると以下ようになる。

- ① 電車の中でのマナーに関する皮肉は理解がされやすい。これは、一般的なマナーはエコ

- 一される思考となり、JNS と JNNS の間で共有されやすい。
- ② 野球に関する既存知識がないと、皮肉が理解されにくい。これは、既存知識がないと、エコーの対象となる意見が確定されないため、エコーされる思考が働かないからである。
 - ③ 典型的な用法でない「しかし」の情報処理が適正にできないと、皮肉が理解されない。

エコーされる思考が共有されないものに関しては、皮肉が理解されにくい。また、典型的な用法でない品詞についての知識も、皮肉を解説するのに重要である。

皮肉の解釈ができないと、表意の解釈をするか、表意の意味領域を拡大して類推をする傾向がある。これは、Leech G.N. (1987: 7) が述べているように「意味の空白地帯を作ってしまうよりも、もっとはっきりした証拠がつかめるまでの自作のシナリオ」を作るためだと思われる。このように、表意の解釈をして発話の意図を取り違え、誤解が生じるという可能性もあるため、含意として皮肉を捉え、理解することは重要なことと思われる。

本研究の結果をふまえ、今後の課題として以下のようなものを挙げる。

- i. エコーされる思考として共有されるものは、ほかにどのようなものがあるのか。
- ii. 母語話者にとっては皮肉として解釈するものを非母語話者が字義通りに解釈したり、字義通りのものを皮肉として捉えるのは、母語からの影響なのか。
- iii. 適正な情報処理ができないと含意が理解されないような品詞は、ほかにどのようなものがあるか。

＜ 参 考 文 献 ＞

- Grice, H. Paul., (1975) 'Logic and Conversation' In P. Cole and J. Morgan, eds.,
 Syntax and semantics, vol. 9, 411-458. New York: Academic Press
- 橋元良明 (1989) 『背理のコミュニケーション』 勁草書房
- Mizutani & Mizutani (1979) "Nihongo Notes 2" pp. 28-29 The Japan Times
- 森田良行 (1998) 『日本人の発想、日本語の表現』 pp. 183-185 中公新書
- Sperber, Dan & Wilson, Deirdre (1986) "Relevance" Second Edition Blackwell
- Wilson, Deirdre & Sperber, Dan (1992) 'On Verbal Irony' in *Lingua* 87 pp. 53-76 North Holland

ⁱ 表意は辞書的意味とも言われるが、辞書にはよく使用される含意も記載されていることがあるため、本論では、ある一文を示された時にほとんどの人が最初に思いつく典型的な意味として表意を定義する。

ⁱⁱ 含意はコンテキストの中にあつて表意とは異なる意味が加わったものである。

ⁱⁱⁱ 表は JNS の高頻度の選択肢を a とし、以下頻度の高いものから順に並べた。

^{iv} 橋元が出した文例 (1989: 43) をヒントにした設問である。

(お茶の水女子大学大学院国際日本学専攻)